

第二章 玉鬘の物語 初夏の六条院に求婚者たち多く集まる

[第一段 玉鬘に恋人多く集まる]

西の対の*御方は、かの踏歌の折の御対面の後は、*こなたにも聞こえ交はしたまふ(以前からの花散里の御方の他にも、紫の上とも御手紙を遣り取り為さいます)。*「お〜んかた」と対の姫を呼称する。この姫に対する呼称や相手との身分差による敬語表現は幅があって、呼称は「西の対」とあれば今のところ間違わないが、敬語表現の分かり難さは文意の読み間違いに直結するので困る。*「こなたにも」は、注にく紫の上をさす。格助詞「も」類例の意は、そもそもの訪問が明石姫君を訪ねたものだから、「こなたにも」という副次的な表現になっている。>とある。「こなた」が<紫の上>なのは上文から続くこととして分かり易い。また、一月の踏歌見物で姫君同士の対面の席に紫の上が同席していたので同時に挨拶を済ませた、との描写が「初音」巻第三章第一段にあって、確かに私も少し違和感を覚えた記憶がある、にはある。何せ、紫の上は実母でないとは言え、明石姫の養育に母親としての権利と義務という管理責任を負っているものであり、殿が敢えて実母の明石君から姫を引き離したのは入内に備えた態勢なのであり、それというのも紫君が王族で源氏殿の正妻の地位を認められていて、それは即ち六条院の総管理者の立場であり、対の姫君が殿の隠し子という建前であったとしても、決して明石姫との対面の序でに挨拶をするべき軽い人ではない、と思うからだ。しかし、だから其の場面は、対の姫は上を軽く見たのではなく、偶々同時に挨拶が出来た、という説明なのだ、と了解した。殿は対の姫に、明石姫の姉として親しく接して遣ってくれ、という言い方で主殿に招いていたし、対の姫が主殿を訪ねた際の順番として、先に殿の実子である明石姫に会うのは姉妹関係としては妥当なのだろう。そして、改めて上に挨拶をすべきところが、同席していたので其の場で済ませた、というのも明石姫がまだ8歳と幼少であってみれば、特に変なことでも無さそうだ。つまり、だから其の副次の意の「にも」は既に其の場の事として、済んだ話なのだ。いまや夏も近い晩春の三月末である。なので此処の「にも」は、下文にある「いづ方にも」の与謝野訳文を参照して、<相談役の花散里の他にも>と読みたい。ただし、下文の「いづ方にも」自体には全く別の解釈を試みる。というのも、此処の「こなたにも聞こえ交はしたまふ」という書き方で読者が素直に感じるものは、此処に句点では無く読点を付けたいくらいに、下の文が「こなた」の視点で「対の姫」が何を相談してきたが語られるであろう期待または予見であり、その読み方こそが一番肝心な事と私は思うからだ。

「深き*御心もちゐや(何て真心の込もった文面なんでしょう)、浅くもいかにもあらむ(これが軽はずみなものである筈は有りません)、けしきいと労あり(とても真剣な態度で)、なつかしき心ばへ(優しい思い遣りなこと)」と見えて(と懸想人の手紙を読んで)、人の心隔つべくものしたまはぬ人ざまなれば(人嫌いなさらぬ人柄なので)、*いづ方にも皆心寄せきこえたまへり(何方の手紙にも、皆に姫は好意をお持ちなさっていたのです)。聞こえたまふ人いとあまたものしたまふ(姫に手紙をお書きになる人はとてもたくさんいらっしゃいます)。*「みこころもちゐ」は分かり難い。「こころもちゐ」は「心持ち居(気分で居る)」ではなく、「心用ゐ(気の使い方、考え方、心積もり)」らしい。それにしても、一体この文は何について話して居るのだろうか。読み手が気になるのは、上文で手紙の遣り取りが話題に成ったのだから、その内容とか遣り取りの具体的な様子とかだが、「御心用ゐ」とあるから、この場面での姫や上の姿勢や態度なのだろうか。または今さらに、対の姫の人物像の概要説明なのか。もし、上文にある対の姫が紫の上と遣り取りした手紙の内容に付いての文だとしたら、下文に「聞こえたまふ人いとあまたものしたまふ。」とあるから、多くの結婚申し込みに如何応えたものか、という相談だったのかも知れない。そして、その紫の上や花散里に對の姫が持ち掛けた相談は全て殿に報告された、に違いない。そういう事情だったと考えて見れば、さらに下

文への続きも理解しやすい。先読みの後付けは避けたい所だが、何の話か分からないのでは正に話に成らないので、一先ずは其の仮定を‘真’として読んでみる。と、この「御心用ゐ」という文は対の姫自身の<心>ではなくて、対の姫が「見(感想)」た貴公子たちの懸想文で、だからこその<御心用ゐ=真心の込められた文面>という言い方に違いないと思い、原文を表記のように括弧で括る、という冒険を試みるに至った。序でに言えば、この段頭あたりに花散里絡みの脱稿が数行ほどは疑わしい。なお、注の<「や」間投助詞、詠嘆の意。>には従う。*「いづ方にも」は「皆」と多数対象表示があるので、花散里と紫の上の<どちらの御方にも>という限定ではなく、懸想文を寄越した<誰にも満遍なく>という総体であり、したがって、「にも」は<に於かれても>という御方たちに焦点が移る基点の格助詞ではなく、<に対しても>という男たちへの思いに目先が移る対象の格助詞、と取る。つまり、「心寄せきこゆ(嬉しく思う)」の主語は対の姫であり、敬語表現は対象の男たちが貴人だからであり、姫が上に「きこえたまふ(手紙を出しなさる)」と読むべきではない。というより「たまへり」こそが、そういう内容の相談を紫の上は姫から受けた、ということを示している、と思う。「心寄せきこゆ」は姫の現在の気持ちであり、「たまへり(とのことでした)」とあるのは、その姫の気持ちを上が知らされたことが過去なのであって、「り」という言い方は過去を示すのではなく上から殿へした経過報告の結果を、語り手が事情説明として客観的に、強いて言えば現在進行形で描写したものだ。因みに、続いて「聞こえたまふ人」とあり、この「きこえたまふ」は<手紙を出しなさる>の意味で、現在ないし現在進行の事柄であり、文法上でも「人」に掛かる説明句となっている。そして此处までが、対の姫が上に相談してきたことの、上から殿への報告結果の、語り手による状況説明と読む。

されど、大臣、*おぼろけに思し定むべくもあらず(穏やかにお決め為されそうも無く)、わが御心にも(御自身にも)、すくよかに親がり果つまじき御心や添ふらむ(しっかりと親の責任を果たせないような色気づく御気持ちも在ってか)、「父大臣にも知らせやしてまし(自分も言い寄って、実父の藤原大臣に親権を返すべく事情を打ち明けてしまおうか)」など、思し寄る折々もあり(お考えになる時もあります)。*「おぼろけ」は<(多く、あとに否定表現を伴って用いる)程度が普通であるさま。通り一遍であるさま。>と大辞泉にある。「おぼろ」は<大雑把な見え方>のようで、「け」が其の「おぼろ」を許容する<様子、その姿勢>だとしたら、「おぼろけ」は対象を離して見ている<冷静さ、穏やかさ>と言えるのかも知れない。

殿の中将は(御子息の中将の君は)、すこし気近く(姫を腹違いの*姉と違って、気安げに)、御簾のもとなどにも寄りて(御簾の前まで近付いて話しかけるので)、御応へみづからなどするも(自分で直接返事するのも)、女はつつましく思せど(姉弟でないことを知る姫は、女心に恥ずかしくお思いだったが)、さるべきほどと人びとも知りきこえたれば(姫は殿の隠し子だったことにするという事情を女房たちも承知していて、二人を姉弟の間柄として応対申ししていたので)、中將はすくすくしくて思ひも寄らず(中將は姫に淡々と接して懸想もしません)。*対の姫は22歳、殿の中將は15歳、明石姫君は8歳、殿は36歳、上は28歳。

内の*大殿の君たちは(内大臣家の御子息たちは)、この君に*引かれて(従弟のこの源中將の口添えで)、よろづにけしきばみ(姫に懸想を伝え)、わびありくを(悶々としていたが)、その方のあはれにはあらで(姫は自分が内大臣の実子と自覚しているので、腹違いの兄弟にそうした恋愛感情は持てず)、下に心苦しう(内心では申し訳ないので)、「まことの親にさも知られたてまつりにしがな(実父に事情をお知らせ申したい)」と、人知れぬ心にかけてたまへれど(人知れず思っていたが)、さやうにも漏らし*きこえたまはず(そうした心情を殿に打ち明け申し為さるもせず)、ひとへにうちとけ頼みきこえたまふ心むけなど(偏に殿を親と信頼してお世話をお願いな

さろうとする気持ちで居るのが)、らうたげに若やかなり(可愛らしく初々しいのです)。似るとはなけれど(何処と無く)、なほ母君のけはひにいとよくおぼえて(やはり夕顔に良く似た素直な雰囲気があるものの)、これはかどめいたるところぞ添ひたる(この姫にはただおっとりとしているだけではない如才が備わっています)。*「おほいどの」と藤原大臣家を言うのは、中將の君にとっての生家という意味だろうか。内大臣家の君たちは、中將の君を姫の異母弟と見て仲介を頼む。が、中將の君の母は葵上であり、没してはいたが内大臣の同腹妹である。だから実は、内大臣家の君たちこそが姫の異母弟で、中將の君は姫の従弟なのである。そう思うと、中將君は姫の弟ではないものの、意外に血縁は近く、殿が中將君に葵上の面影を見ようとする気持ちも、複雑な意味合いを持ってくるようにも感じる。*「引く」は<導く>ではありそうだが、中將君が率先して姉と従兄を取り持ったのではなくて、中將君が従兄の申し込みを<助けた>のだろうし、それが上文の中將から姫への話の中身だったのだろう。*「きこえたまふ」は注に<玉鬘が源氏に。>とある。

[第二段 玉鬘へ求婚者たちの恋文]

*更衣の今めかしう改まれるころほひ(夏物に変わる四月となって)、空のけしきなどさへ(空の雲の形まで)、あやしうそこはかとなくをかしきを(なぜか何となく楽しげな日々を)、のどやかにおはしませば(殿は公務も無くいらして)、よろづの御遊びにて過ぐしたまふに(管弦や歌詠みや写生などでお過ごしになっていると)、対の御方に、人びとの御文しげくなりゆくを、「思ひしこと(思った通りだ)」とをかしう思い、*ともすれば渡りたまひつつ御覧じ(新しく届いたらしいと耳にするや様子を見に御方のお部屋に立ち寄っては御文をご覧になって)、*さるべきには御返りそそのかしきこえたまひなどするを(殿が相応しいと選んだ相手には御返事を書くようにと促し申しなさるので)、うちとけず苦しいことに思いたり(その殿の干渉で御方は、御文を楽しく読めずに嫌な事だと思いにになりました)。*「ころもがへ」は季語としては<陰曆四月に冬物から夏物に衣替えること>と古語辞典にある。卯月である。*「ともすれば」は特定の事柄ではなく<何かということ>くらいに使うことが多いようだが、此处では<新たに御文が来た(と)で(も)耳に(すれば)>と特定される、と思う。*「さるべき」は<妥当な、相応しい>くらいだろうか、曖昧な語なのでいつも分かり難く、多くは<資格ある身分>だったりするが、太政大臣家の姫に身分の低い者が訪問の申し込みをする訳も無く、その中で更に厳密に身分だけで相手を選んだら恋文を遣り取りする意味も無い。此处では<殿が相応しいと判断した相手>で、だから姫は自分が御文に「うちとけず苦しい」と不満に思った、のだろう。

兵部卿官の、*ほどなく焦られがましきわびごとどもを書き集めたまへる御文を御覧じつけて(性急で率直な言い方の受諾を請う文言を書き連らねなされた恋文を見つけなされて)、*こまやかに笑ひたまふ(殿は情愛を込めて微笑みなさいます)。*「ほどなし」は<間が無い、量が少ない>とあり、三月末の花見から然程時間も経っていないとか、なかなか手紙の返事が来ないとか、という事情を指しているとも考えられるが、此处は「焦られがましき」と同列に重ねて「わびごとども」を修辞していると思えば、宮の性格が<性急>なのだと思いたい。また、「焦らる」は「いらる」で<いらつく、不満が表に現れて刺々しい>とのことだが、それなら何故「苛る、苛らる」と表記しないのだろうか。不思議だ。因みに、「焦がる(こがる、焦げる・焦げるほど思い悩む)」の思い詰める印象と、「焦らる」の当り散らす印象とは相当違う。なお、「わぶ(侘ぶ)」は<不遇を嘆く>とあるので、「わびごと」は<泣き落とし口調の要求>かと思う。*この「こまやか」は「細やか(細かく)」ではなく、「濃まやか(濃密に)」で<愛情が深い>という意味らしい。

「はやうより隔つることなう(小さい時から遠ざける事無く)、あまたの親王たちの御中に(多くの兄弟の中で)、この君をなむ(この君とは)、かたみに取り分きて思ひしに(互いに特に親しく思って来たが)、ただかやうの筋のことなむ(ただこうした恋愛ごとについては)、いみじう隔て思うたまひてやみにしを(全く別に考え申して関わり合わずに今まで来たものを)、世の末に(この歳になって)、かく好きたまへる心ばへを見るが(このような恋心をお見せになる手紙を見るのは)、をかしうもあはれにもおぼゆるかな(面白くも感慨深くも思えるものだ)。

なほ(ぜひ)、御返りなど聞こえたまへ(御返事申し上げ為され)。すこしもゆゑあらむ女の(少しでも教養があろうという女なら)、かの親王よりほかに(この皇子を置いて他には)、また言の葉を交はすべき人こそ世におぼえね(何度も歌を詠み交わせる人など居ません)。いとけしきある人の御さまぞや(とても風雅を心得た御人柄です)」

と(と殿は)、若き人はめでたまひぬべく聞こえ知らせたまへど(若い女が歡心を御寄せになるように口添えなさったが)、*つつましくのみ思いたり(姫は殿の御助言を重荷にばかりお感じでした)。*「つつまし」は<気兼ねを感じるさま、気が引けるさま、気後れする様>とある。宮の王族身分に筑紫育ちの姫は気後れしたのか、とも思ったが、姫は外形では今や太政大臣家の娘であり、生来の自覚の上でも藤原長者の娘であるので、雲上人たることに戸惑いは無いのだろう。それに私の読みでは、姫は基本的に懸想文を歓迎しているのであり、それを心から楽しめないことが<気後れする様→気が重い状態>なのだから、殿の助言という御節介こそが大迷惑なのだ。

*右大将の、いとまめやかに(実に実直で)、ことことしきさましたる人の(格式ばった態度をする人の)、「*恋の山には孔子の倒ふれ(恋の険しさ賢者の迷い)」まねびつべきけしきに愁へたるも(を地で行くように堅い調子で恋情を訴えた手紙も)、さる方にをかしと(如何にも人柄が見えて面白いなどと)、皆見比べたまふ中に(姫への御文を残らず見比べなされる中に)、*唐の縹の紙の(からののはなだのかみの、水色の厚紙の)、いとなつかしう(実に好ましく)、しみ深う匂へるを(香を深く焚き染めて匂うものを)、いと細く小さく結びたるあり(ごく細く割いて小さく結んであるものがありました)。*「うだいしゃう」は右近衛府の長官で光君も勤めた要職である。というよりも、蔵人(帝の私的な近親者)の内特に高位の家柄の者である。注には<鬚黒右大将、ここが初出。春宮の母である承香殿女御の兄で、将来の有力者。>とある。承香殿女御は太后の兄の子だった筈だから、夫で春宮の父たる朱雀院の従妹に当たり、その兄であるこの人物もかつての右大臣家筋の有力な藤原氏に違いない。*「こひのやまにはくじのたふれ」は、注に<「孔子の倒れ」は当時の諺。孔子ほどの聖人も恋の道では失敗するという意。「世俗諺文」「今昔物語集」(巻十一-十五)に見える。>とある。*「唐(から)」は「唐の紙」で「唐紙(たうし)」のこととされ、古語辞典に<中国から輸入した紙。コウゾの皮に若竹の繊維を混ぜて漉いたもの。厚く重く、質はもろく裂けやすい。墨汁の吸収が良く、書画用、または表装の裏づけにした。>とあり、大辞泉には<中国で作り、日本に輸入された紙。質はもろいが、墨の吸収がよいので古来書画用などとして愛用された。19世紀に入って和唐紙とよばれる模造品も作られた。>と説明される。その「模造品」が「唐紙(からかみ)」で<中国から渡来した紙。また、それに似せて日本で製した紙。華麗な模様のある厚手の紙が、平安時代には衝立(ついたて)・襖障子(ふすましょうじ)、その他の装飾に用いられた。江戸時代には襖専用の紙を「からかみ」、中国産の紙を「とうし」とよんで区別した。>と同辞書に説明されている。「縹(はなだ)」は<水色>。

「これは、いかなれば、かく*結ぼほれたるにか(これはどうして、このように結び付けられたままなのか)」 *「結ぼほる」は「結ぼ〜る」と発音するのだろうかから「結ぼる」の上品な言い方、または女言葉くらいか。ただ、「むすぼる」も「結ぶ(固まる、生じる、約束する)」と同意義をくそのような状態になる>くらいに婉曲表現したものに見えるので、ずいぶんやわらかな言い回しのようなのだが、それだけ「結ぶ」ということが重大なのかも知れない。なお、注には<源氏の詞。玉鬘は柏木からの恋文なので開かずにはいた。>とある。腹違いの弟では結ばれようも無いのだろうが、結んだままに戻したと成ると、姫の藤原氏の自覚を強く感じさせる。対の姫は22歳。藤中将は21歳のようで、15歳の源中将より六歳年上らしい。

とて(と言って殿はそれを)、引き開けたまへり(開いてご覧になりました)。手いとをかしうて(筆跡はとても美しく)、

「思ふとも君は知らじなわきかへり、岩漏る水に色し見えねば」(和歌 24-09)

「この真心は届くのか、水色の紙の涙文字」(意識 24-09)

*「わきかへり」の「沸き返り」と「湧き返り」の多重性。水色の紙に湧水を詠む洒落っ気。「水」や「色」は多義語だが、「いはもるみづ」はあっさり<湧き水>と読んで、清々しく味ええば良いのだろう。男泣きや第一チンポ汁なども当時としては風情豊かな面白さかと思うが、今となってはイヤラシイのかと姉弟なら尚更に男臭さは自粛して、歌筋はく君を思うと、君は知らないだろうが、僕の恋心はこんなに沸き返る、でも湧き返る岩清水が無色のように分かって貰えないだろうと泣けてくる>くらいに読んでおく。

*書きざま今めかしうそぼれたり(詠みっぷりは若者らしい軽妙さでした)。 *「かきざま」は<書風、書体>と古語辞典にあるが、文字については「手いとをかしう」と既にあり、また是は手紙ではなく歌の一首が書かれた紙切れだろうから、その歌の印象と取る。「いまめかし」は<当世風、現代的>とあるが、つまりは<若者らしい>と取る。「そぼる」は「戯る」と表記され<じゃれる、しゃれる>とあるが、ヒヤカシではないのだから<閃きのある軽妙さ>と取る。

「これはいかなるぞ(是は誰からか)」

と問ひきこえたまへど(と殿はお尋ねになったが)、はかばかしうも聞こえたまはず(姫は逆らうとも無くお応えなさいません)。

[第三段 源氏、玉鬘の女房に教訓す]

右近を召し出でて(殿は右近をお呼び出しなきて)、

「かやうに訪づれきこえむ人をば(このように手紙を遣して来る人については)、人選りして(良く相手を選んで)、応へ*などはせさせよ(姫に返事を書かせなさい)。 *「など」は「ひとえり」を受けて「いらへ」の書き方を<このように>と例示するかの言い方で、以下の文にその説明が続く、のだろう。

好き好きしうあざれがましき今やうの人の(恋愛を楽しみたい若者が)、*便ないことし出でなどする(作法をわきまえず力づくで女を犯したとしても)、*男の咎にしもあらぬことなり(女が適切な応対をしていなかったのなら、必ずしも相手の男にだけ非が在るものでも無い)。*「びんないこと」は<けしからん仕業>で<強姦>だが、通り魔ではなく面識がある又は手紙の遣り取りをしてきた相手が、女の同意を確認できない段階で力づくで肉体関係に及ぶ、という形なので<無作法>くらいが良いのかもしれないが、事件報道でなされる「暴行」とか「乱暴」とかいう隠蔽語用への反発を込めるという些か場違いな動機も伴って、敢えて<犯す>と言い換える。*「をとこのとが」は、どうやら末摘花強姦事件を反省しての弁らしい。それも、やはり光君は恋の取り持ちには側近女房の心得が大事と考えていて、右近にこういう言い方をする所を見ると、今でも末摘の女房たちの対応を恨んでいるらしい節が窺える。下文をその心算で読む。

我にて思ひしにも(自分の経験から言っても)、あな情けな(何て情け無く)、恨めしうもと(恨めしいことかと)、*その折にこそ(その無理強いする場面では)、*無心なるにや(無分別になると言うか)、もしは*めざましかるべき際は(言い換えれば意外な事態に出くわした時には)、けやけうなどもおぼえけれ(我を忘れてしまったりもする、のだから。)、*「そのをり」は<末摘花強姦事件>と読む。*「むじん」は<考えの無さ、浅はかさ>とあり、また和歌で<滑稽な歌詠みのこと>ともあるので、自嘲気味な言い方かと思う。*「めざまし」は<意外な事態に驚く>。「きは」は<身分、分際>の場合が多いが、末摘事件の場面に即せば<際立った正に其の場面>だろう。「けやけう」は「けやこう」と発音するのだろうが、「けやけし(尤けし、異常だ・強引だ)」+「う(曖昧表現)」の音便で<劇高のあまり正体を失う>と読む。「おぼえけれ」は、注釈にあるように「その折こそ」を受けた已然形の係り結びだから、此処が文落で、文意は事情説明と読む。

*わざと深からで(わざと恋の話題をはぐらかして)、花蝶につけたる便りごとは(季節柄の挨拶で手紙を返すのは)、心ねたうもてないたる(男の心を焦らす遣り方で)、なかなか心立つやうにもあり(かえって相手の気持ちを奮い立たせたりするものだ)。また(まして)、さて忘れぬるは(そのまま返事を出し忘れるとあっては)、*何の咎かはあらむ(男に何の罪があるか)。*「わざと」とある以下の文は「応へなど」の例示の説明、と読む。ということは、「好き好きしう戯れがましき」から「尤けうなども覚えけれ」までの上文は、「応へなど」が不適切ないし失敗した場合の悪例を示して注意を喚起した文、に違いない。で、「深からで」は懸想文の<深い思い>に対して態と<深く無く>する返事なのだから<懸想をはぐらかして>と読む。*「なにのとが」は上文の「男の咎にしもあらぬ」を受けている、のだろう。

ものの便りばかりのなほざりごとに(試し撃ちに過ぎない思い付きの恋の申し込みに)、口疾う(くちとう、即答することを)心得たるも(習慣にしている尻軽さも)、さらでありぬべかりける(厳に慎むべき)、後の難とありぬべきわざなり(後で困ったことに成り兼ねない応対だ)。

すべて(総じて)、女のものつつみせず(女が慎み無く)、心のままに(感じたままに)、もののはれも知り顔づくり(風情も分かった顔をして)、をかしきことをも見知らむなむ(恋の遊びに興じようというのは)、その積もりあぢきなかるべきを(その詰まる所は不都合になりかねないものだが)、宮(兵部卿宮や)、大将は(右大将は)、*おほなおほな(それぞれ身分があり真剣で)なほざりごとをうち出でたまふべきにもあらず(思い付きで女に声をかける類の人ではないので)、またあまりもののほど知らぬやうならむも(逆にあまり素っ気無くして御返事をしないようでは)、御ありさまに違へり(姫の御立場に相応しくありません)。*「おほなおほな」は注に<見境もなく、の意。>とある。少し分かりにくい。「おほなおほな」は<おのおの(各々)>の語感だし、辞書には<各自めいめいに>と

あり、「あふなあふな」「おふなおふな」に同じとある。で、「あふなあふな」には<身の程に相応しく、身分相応に>との説明があり、<真剣に、本気に、精一杯>ともある。どうやら、<各自めいめい>とは<それぞれがそれなりに>という意味合いのようだ。

その際より下は(この方々の身分より下の者については)、心ざしのおもむきに従ひて(歌詠みの熱意の度合いに応じて)、あはれをも分きたまへ(性格を見極め、)。労をも数へたまへ(学識も慮りなさい)」

など聞こえたまへば(など申しなさると)、君はうち背きておはする(姫君は顔を背けていらっしやるが)、側目いとをかしげなり(その横顔がとても綺麗でした)。*撫子の細長に(薄桃色の飾り着に)、このころの花の色なる御小桂(薄緑の着物という)、あはひ気近う今めきて(その取り合わせは親しみがある新しさで)、もてなしなども(着こなしなどに)、さはいへど(それでも以前は)、田舎びたまへりし名残こそ(田舎育ちの縮まりの無い着付けが)、ただありに(少し在って)、おほどかなる方にのみは見えたまひけれ(おおらかな人柄とばかりに見えていなさったものの)、*人のありさまをも見知りたまふまに(京都人の洗練された物腰を見知りなさる内に)、いとさまよう(とても様子が良く)、なよびかに(しとやかに)、化粧なども、心してもてつけたまへれば(気をつけてなさっている)、いとど飽かぬところなく(ますます至らぬ点も無く)、はなやかにうつくしげなり(今は華やかに見映えしました)。*「なでしこ」は、重ねの色目だと<表は紅梅、裏は青色で夏服>と古語辞典にあり、Webで色見本を検索しても<紫地に赤を重ね着する>ようだが、此処の記述は重ねの説明では無さそう。 「なでしこ」自体の色見本はざっとピンクないし薄桃色で、「細長」は飾り上着だから「おんこうちき」という部屋着の上に着ていた、という描写。では、「このころの花の色」とは何色か。注には<前に衣更とあった。四月の花は卯の花。すなわち卯花襲の小桂。>とある。女物の「卯花襲」は<緑地に白を重ね着する>ようで、勢いのある緑の枝葉にウツギの白い花が咲く初夏の風情を表すらしいが、さっぱり印象がつかめない。大体、「襲(かさね)」ということ自体が、重ね着の襟や袖口の色合わせなのか、袷仕立ての裏地と表地の取り合わせなのか、そのどちらにも使う言葉のようで、実物を知らない私などは元々実感の無い事柄だ。それでも、此処の記事は細長と小桂の取り合わせを説明しているのだから、白い上着に桃色の飾り布だったのか、薄緑の上着に薄桃色の飾りだったのか、どちらかくらいを想像する。*「人のありさま」は注に<六条院の女性の様子をさす。>とある。分かり易い指摘だが、「田舎び」に対しては「宮処び」でも良さそう。

他人と(ことびとと、他の男の妻にして)見なさむは(しまうのは)、いと口惜しかべう*思さる(実に惜しいと殿はお思いにならずにはいらっしやれません)。*「おぼさる」は注に<「る」自発の助動詞。たいそう残念に思わずにはいらっしやれない、の意。>とある。従う。ただ、「側目いとをかしげなり」と思う親心と男心には相当な違いがある気がするが、直線的な語り口であっさりこういう言い方をすると、当然にも殿には元々下心があったという念押しを感じる。確かに、既に「初音」巻第一章第四段の年始廻りの記事に殿の色気は明示されていたし、元々王家の増して<光る>と最上の美しさを称えられた殿が自分の情欲や男根の屹立を天の啓示として大事に思う帝王学を身に付けていた事も読解の基本線ではあるだろうが、弟宮への取り計らいに腐心するかの記事が在った直後に、あまりにも自然に自らの欲情を言われると私などは、姫でもないのに少し戸惑う。「なほ」の一言でもあれば分かり易いが、其処が無言で殿の逡巡を示す作者一流の筆致か。

[第四段 右近の感想]

右近も、*うち笑みつつ見たてまつりて(喜ばしく殿と姫を拝見申して)、「親と聞こえむには(親と申し上げるには)、似げなう若くおはしますめり(似合わないほど殿は若く御出でのようです)。さし並びたまへらむはしも(御夫婦として並び立ちなさるとしても)、あはひめでたしかし(さぞ美しい取り合わせに見えることでしょう)」と、思ひみたり(思っ居ました)。 *「うちゑむ」は笑顔には違いないのだろうが<微笑む>と言ってしまうと、上から目線で同等以下を見守る感じになってしまう。「うち」は「打ち」で<出し抜け感>があり、思わず何かをしてしまうのだから<ふと笑う>くらいかもしれないが、その言い方も右近に意図や含みが在りそうな感じがして収まりが悪い。ならばいっその場面では右近の気持ちまで勝手に読んで<喜ばしく>と言い切ってしまう。

「*さらに人の*御消息などは(決して不用意に殿方の御来意などは)、聞こえ伝ふることはべらず(姫に取り次ぎ申しておりません)。 *「さらに」は<重ねて、新たに、その上に>の他に、打消しを伴う<決して>の意味になる場合があると古語辞典に説明されている。とはいえ、この語は丸々現代語でもある。意味も語用も基本的には今に変わらない。その割に改めて見て見ると含みが在りそうで、だから古語としてというよりは此の際に、この場面に即して少しこの語を考える。先ず「に」だが、是が名詞にも動詞にも付くという事が微妙な所なのかも知れないが、意味としては<述語対象の修辞形容を限定する助詞>という事で良いだろう。で、「さら」だが、これは一意には「さら(まっさら、新しい、手付かずだ、きれいだ、平坦だ)」であり、その「新しさ」が別概念の事象(another)ではなく、同概念の事象(return)であることから、「更新(update, overwrite)」の意味になり<重ねて、その上に>となる、ように推量できる。が、もう一意に「さ(そのように)ら(ある、の未然形)」が成立してしまい、双意が互いに強調ないし複意出来てしてしまうことが、この語の多重性なのだろう。この場面は、右近が殿の注意を受けて弁明がましく、ということは指摘の意味を良く理解していると表明しつつ、同意ないし了解しているのだから、殿の意見に留意して<決してそのように不用意にはさらさら>となる、と思う。このノートは面倒で、たいした内容でもないかと冗長気味にさえ思ったが、何故か省略しかねて、思い付いたままに記した。 *「せうそこ」は<消息文=信書=手紙>とあるが、もう一つ重要な意味に<他家を訪れて、来意を告げ、案内をこうこと。(大辞泉)>があり、その案内役とは夜這いの手引きこそが側近女房の役目なのだから、此処は姫に面会を求めて来た客の<御来意>と読む。というのも実は、此処の右近の口上では<男たちの手紙>を「御文」という言い方で下文に示しているので、この「御消息」は別の事柄でないと奇怪いからだ。

*先々も知ろしめし(以前も御覧になって既にご案内の)御覧じたる三つ、四つは(また今も御覧になった三、四通は)、引き返し(突き返して)、はしたなめきこえむもいかがとて(失礼申し上げてもいかがと)、御文ばかり取り入れなどしはべる*めれど(御手紙だけは受け取りなどしておりますところが)、御返りは(御返事は)、さらに(姫は不用意には決して、為さいません)。聞こえさせたまふ折ばかりなむ(殿がお勧めなさる時だけです)。それをだに(それでさえ)、*苦しいことに思いたる(難しい事とお思いで、楽しんではいらっしゃいません)」 *「さきざき」は「前々」であり未来ではなく<過去>、とのこと。「しろしめす」は「知る」の尊敬語「知ろす」の更に丁寧語、とのこと。 *注に<推量の助動詞「めり」主観的推量。他の女房がしているようだ、という意。>とある。が、反論する。右近は筆頭女房であり、他の女房の監督責任がある。他の女房がしたことでも、他人事のように言えない立場だ。また、だからこそ「さらに～はべらず」と断言している。此処の「めり」は殿に対しては業務報告だが、宮や大将に対しては遠慮がある女房としての立場で言う婉曲表現で、傍観の<しているよう>ではなく、役目柄の<しているところ

ろ>と解すべき、ところかと思う。 *「苦しいこと」は良く分からない。思うように返事が書けないのは、能力なのか、気持ちの整理なのか、殿の干渉が邪魔なのか、それともそういうこととは全く別のことを言っているのか、分からない。ただ、殿が「口疾う心得たるも、さらでありぬべかりける」と女が心のままに恋に遊ぶことを否定していたので、右近としては姫が<恋を楽しんではいない>と釈明する必要が在った、のかも知れない。

と聞こゆ(と右近は申し上げます)。

「さて(ところで)、この若やかに結ばれたるは誰がぞ(この華やかに結ばれた歌は誰が詠んだものか)。いといたう書いたるけしきかな(実に上手い書きっぷりだな)」

と、ほほ笑みて御覧ずれば(殿が微笑んで唐の縹の紙きれを御覧になると)、

「かれは(それは文遣いが)、*執念う(しふねう、こっそり)とどめてまかりにけるにこそ(置いていってしまったものでして)。内の*大殿(うちのおほいどの、内大臣家)の中将の、このさぶらふみるこそぞ(此処の対に仕えて居ります遣いのミルコを)、もとより見知りたまへりける(以前から見知っていらして)、伝へにてはべりける(その者の取次いだもので御座います)。また(誰も)見入るる人もはべらざりしにこそ(見張って居ない時だったものですから)」 *「執念し」は<執着する、執念深い、しつこい>と古語辞典にあるが、主語は文遣いの「ミルコ」という者らしく、<執着心>というよりは<立場上困ってともかくも強引に>という事情かと思う。ただ、下にある「見入る」が<注意して見張る>の他に<モノノケなどが執念深く取り付く>という意味があるので、それに掛けた軽口めいた洒落言葉のようにも思えて、この台詞は本来の意味よりは語感の印象と言ひ回しから読むべき文かも知れず、とすれば<人目を盗んでこっそり>が執念の静かな闘志に似通うか、などと考える。更に先読みながら、ミルコは下に「下臈」とあり、部屋に出入りできる遣いながら下位の童女か女房の付き人あたりで、右近が曲者呼ばわりすることを殿も楽しく聞くような愛嬌のある愛すべき人柄なのであり、「見入る」も冗句なのだろう。また、ミルコについての説明に「見知りたまへりける」という敬語表現があるので、中将がミルコを経緯は不明だが以前から<見知っていらした>という事情らしい。ところで先の第一段に、「内の大殿の君たちは(内大臣家の御子息たちは)、この君に引かれて(従弟のこの源中将の口添えで)、よろづにけしきばみ(姫に懸想を伝え)、わびありく(悶々とする)」という記事があったが、藤中将は20歳で15歳の源中将には頼み辛い年回りだったのか、それもありこれもありだったのか、何となく若い日の源氏大臣と藤原大臣の仲を思わせる設定だ。 *「大殿」は「おほとの」なら<邸宅、またはその当主>で、「おほいどの」は<大臣、またはその邸宅>ということらしい。ここでは「大臣(おとど)」がその当人を言うのに対して、「大殿」はその家のことを言っているようだ。生活感を知らない私には紛らわしい。

と聞こゆれば(と右近が申し上げれば)、

「いとらうたきことかな(それは感心だ)。下臈なりとも(下女といえども)、かの*主たちをば(そうした身分の高い方がたに)、*いかがいとさははしたなめむ(遣いを断るなどの、そんなひどい失礼は出来ないだろう)。 *「主(ぬし)」と言っても、ミルコの主人は対の姫であり、延いては殿である。その殿が中将を「主」という意味は<御仁>くらいの尊称だろうが、それを更に客観的に言って<身分のある人>。 *「いかが」は、注に<「いかが一む」反語表現。>とある。

公卿といへど(参議の家柄の中でも)、この人のおぼえに(この人ほどの人望には)、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ(まず及ばない者ばかりだ)。さるなかにも(だというのに)、いとしづま

りたる人なり(ごく控え目な人柄だ)。*おのづから思ひあはする世もこそあれ(いつかは分かる日が来るのだろうが、)。掲焉にはあらでこそ(はっきりとは言えないので)、言ひ紛らはさめ(ごまかすしかないか)。見所ある文書きかな(色々考えさせられる手紙だな)」 *「自づから」は、注に<自然といつかは玉鬘の素姓を知ることがあろう、という意。>とある。ま、右近に言っているのだから、そういう複意のある隠語なのだろうが、右近に指示しているというよりは自問自答の独り言くらいの感じに見える。「思ひあはする世」は<頭角を現す日>であり<腹違いの姉弟と知る日>である。「掲焉(けちえん)」は公に掲示して周知させる形態が原義のようで、明示されて<はっきり分かる>という意味らしい。源氏大臣は太政大臣で実務は内大臣が執行したようだが、それを最終的に監査して帝に奉る権威だったのだから、殿が「掲焉」と中將を褒めたのでは人事決定を意味してしまう。根回しのない抜擢は和を乱す。だから公然とは口に出来ない。そして当然、対の姫が内大臣の娘だということも、公然とは口に出来ない。そして、これらの事柄は右近の手に負えるものではなく、殿自身が収める他ないので、指示では無く自問。「見所ある」と口にしたのも、右近に同意を求めるのではなく、事情を分かる者に苦悶を話して、少しでも客観的に落ち着いて考えたい、という慰めだろう。

など、とみにもうち置きたまはず(すぐにはその手紙をお置きになりません)。

[第五段 源氏、求婚者たちを批評]

「かう*何やかやと聞こゆるをも(このように中將をごまかそうなどと申し上げますのを)、思すところやあらむと(姫には別のお考えもあろうかと)、*ややましきを(思い遣られますが)、かの大臣に知られたてまつりたまはむことも(あちらの大臣に知って頂くにしても)、まだ*若々しう何となきほどに(まだ京の作法に馴れず何の前触れも無いままに)、こころ年経たまへる御仲に(長年離れて暮らしていらした内大臣家御家族に)さし出でたまはむことは(分け入りなさろうというのは)、いかがと思ひめぐらしはべる(いかがかと思ひ廻らしているのです)。 *「なにやかや」は注意した前言の全てを指しているのかと思ったら、続いて殿は<今はまだ娘であることを藤原大臣家には打ち明けるべきではない>旨の言い訳をしているので、此処は直前の中將の手紙についてのことらしい。ということは、「おぼすところ」とは内大臣に事情を知らせて、中將に姉弟であることを早く説明すること、なのだろう。 *「ややまし」は<ややもすればそういうことに成りがちかと、懸念される>だろうから、反論の接頭句と読んで逆接の接続助詞を「(ところ)を」から今風の「が」に変えた。 *「わかわかし」は<子供っぽい→未熟>だろうが、22歳の姫に面と向かって言うなら、多分<未熟←田舎育ちで京暮らしにまだ馴れていない>という意味なのだろう。

なほ世の人のあめる方に定まりてこそは(やはり世間が認めるような身分の高い相手に結婚が決まってこそ)、人びとしう(世間体が整って)、さるべきついでもものしたまはめと思ふを(内大臣に打ち明ける機会もお有りになろうかと考えますもので)。

宮は、独りものしたまふやうなれど(独り身でいらっしゃるようだが)、人柄いといたうあだめいて(とても多情な方で)、通ひたまふ所あまた聞こえ(お通いなさる女の所は数多いとのことで)、召人とか(‘お呼ばれさん’などと)、*憎げなる名のりする人どもなむ(いやらしく呼ばれる女房たちも)、数あまた聞こゆる(多く居ると聞きます)。 *「にくし」は<面白くない、気に入らない>という思いだろうが、「こころにくし」が<表ざたに出来ない微妙な事を上手く処理する気の利き方>であるように、「にくし」には<秘密を掴まれた弱みがあって、思いのままに動かせない>ようなく頼りになるだけに気を使う>重さが

あって、「わたし」のように一方的に＜排除したい障害＞とは違う＜いやらしさ＞がある、と思う。此处で言う「めしうど」は＜主人が肉体関係を持つ使用人＞であり、身分が低く決して家の管理者になれないので、あくまでも個人的な存在だが、主人が欲情するほどの器量や性格の持ち主であり、主人の処遇によっては実質で多くの権限を持つ可能性はある。「憎げなる」は主人にとっても御方にとっても多重的な意味を持つ言葉だ。尤も、現代語の「憎い」も「憎し」と同じ概念なので、「憎げなる名のり」を「憎い呼ばれ方」と言い換えても＜いやらしさ＞は表現される、とは思ふものの、現代語のその言い方はこの場の話者(殿)と聞き手(姫)の関係性では共通認識が得難いと独断して、敢えて＜いやらしく＞と明示する。

さやうならむことは(そうした男の浮気などは)、*憎げなうて(根に持たず)*見直いたまはむ人は(特に騒ぎ立てしなさらぬ人が奥方なら)、いとよなだらかにもて消ちてむ(ごく穏やかに収めて終わらせるでしょう)。 *憎げなうては＜憎らしがらず＞で良いかとは思ふが、「憎し」は＜深い不快＞であり＜その不快を根に持った次第に深まる嫉妬＞が話題に思えるので、話題に沿って言い換える。 *見直いは「見直す(点検しなおす)」ではなくて、「見(見る)+直(なほ、平坦)+い(強調の副助詞)」のようだ。「見る」は＜考える＞。「なほ」は＜普通の状態、真っ直ぐで歪みがなく問題無い＞。「い」は＜敢えて～して＞。つまり、「見直いは＜敢えて問題無いものと考えて→特に騒ぎ立てないで＞。

すこし心に*癖ありては(嫉妬深いと)、人に*飽かれぬべきことなむ(嫌われてしまうというのは)、おのづから出で来ぬべきを(良くある事なので)、その御心づかひなむ*あべき(そう心得ておくべきでしょう)。 *くせは＜難点、欠点＞でもあるが、「直」との対比で言えば＜歪み＞であり＜わだかまり＞であり、注にあるように＜嫉妬をさす。＞のだろう。 *飽くは＜満杯で、もうこれ以上は欲しくない→厭になる＞で、「飽きる」は＜つまらなく思う＞だが「人に飽きられる」は今でも＜嫌われる＞という意味だ。 *あべしは＜「あるべし」の音便形「あんべし」の撥音「ん」を表記しないもの。＞と古語辞典に解説がある。ハネ音の「ん」は小文字にすべき非独立の前語付属音節だが、小文字の「ん」が印字できないので便宜上「ン」を使えば、発音は「あんべし」というところか。「あべき」は「なむ」を倒置した強調表現での「あべし」の連体形だから、此处では「あんべき」と読むようで、意味は＜在るべき→して置くべき＞。

大将は、*年経たる人の(長年連れ添った奥方が)、いたうねび過ぎたるを(ひどく老けてしまったのを)、*厭ひがてにと求むなれど(嫌う気持ちもあってか求婚してきたようですが)、それも*人びとわづらはしがるなり(それも何かと面倒な話な訳です)。 *としへたるひととは＜長年過ごした人＞という言い方だが、それが＜長年一緒に暮らした連れ合い＞という意味になるのは定型句みたいなものだろうか。他に読みようが無いようにも見えるが、字面だけでは分かり難い言い方だ。 *厭ふは＜嫌う、嫌気する、避けたい＞。「がてに」は＜～まじりに、～のついでに、～ということもあって＞とぼかした言い方のようで、「がてらに」と同じようだ。 *ひとびとの対象は関係者に限定はされるだろうが、誰と特定は出来ない＜誰か＞であり、つまり＜何かと＞。「なり」は注に＜伝聞推定の助動詞。＞とあるが、噂話の「わづらはしがる(鳴り)」を聞くような客観的な言い回し、と取れば＜(話な)訳(事態状態の事情説明)です＞。

さも*あべいことなれば(そのような問題がありがちなことなので)、さまざまになむ(いろいろと)、人知れず思ひ定めかねはべる(思いあぐねて決めかねているのです)。 *あべいは「あべき」の音便ということだから、「あんべい」と音読するのだろうか。「べし」は推量、妥当、可能などを示す助動詞で、此处では可能性と取る。

かうさまのことは(こうした結婚話は)、親などにも(親などにも縁戚に関わることなので)、さはやかに(割り切って)、わが思ふさまとて(自分の気持ちだからと)、語り出でがたきことなれど(言い出しにくい事だが)、さばかりの御齡にもあらず(そう小さい御歳でも無いのだから、)。今は、などか何ごとをも御心に*分いたまはざらむ(今は如何して何でも御自分で判断お出来になれないことがあります)。*「分い(わい)」は「分く(わく、判断する)」の連用形「わき」の音便。ところで、此処の殿の発言文には「い」が多い。「い」には<為さり>みたいな尊敬や丁寧の語感もあるが、むしろ<既定事実として当然にし為さって>みたいな上から目線で常識を押し付ける語感が強く、上品ぶるほど厚かましい「上流言葉」の言い回しなのだろう。

まろを(この私を)、昔さまに*なずらへて(幼い日のことを思い出して)、母君と思ひないたまへ(母君と思ひ做して下さい)。御心に飽かざらむことは(親に頼りたいあなたの御期待に添えないことは)、心苦しく(不本意なので) *「なずらふ」は<準ずる>。「準ずる」ためには何かと<見比べる>。「見比べる」ためにはその何かを<思い出す>。

など(などと殿が)、いとまめやかにて聞こえたまへば(とても誠実顔でお話なさると)、*苦しうて(姫は考えがまとまらず)、御応へ聞こえむともおぼえたまはず(何とお応え申したのか思い付きなさいません)。いと若々しきもうたておぼえて(しかし、何時までもお応え申さない子供じみた態度ではいけないとお思いになって)、 *「くるし」は<困る>と言ってみても、何に困っているのか分からない。で、前後の意味から<考えがまとまらない>とした。

「何ごとと思ひ知りはべらざりけるほどより(何も分からなかった小さい時から)、親などは見ぬものにならひはべりて(親の居ない暮らしでしたので)、ともかくも思うたまへられずなむ(親への気持ちを、どう思って良いのかも分からないので御座います)」

と、聞こえたまふさまのいとおいらかなれば(お話しなさる姫の答え方がとても素直で正直に見えたので)、げにと思いて(殿はそれもそうかとお思いになって)、

「さらば世のたとひの(それでは、母君同様と言う事では無しに、世に良く言う)、後の親をそれと思いて(育ての親を実の親と思う考え方で)、おろかならぬ心ざしのほども(形ばかりでは無く心底親代わりになって私が貴方をお世話しようという気持ちの深さを)、*見あらはし果てたまひてむや(全て汲み取って下さいませんか) *「見あらはす」は「見顕はす」で<見破る>と大辞泉にある。「見顕はし果つ」は<見破り尽くす→全て汲み取る>か。

など、うち語らひたまふ(お話し合い為さいます)。*思すさまのことは(しかし殿は本心でお考えの恋心は)、まばゆければ(気恥ずかしくて)、えうち出でたまはず(とても打ち明けなされません)。けしきある言葉は時々混ぜたまへど(それらしい言葉は時々ほのめかしなされたが)、見知らぬさまなれば(姫は気付かない様子なので)、すずろにうち嘆かれて*渡りたまふ(殿はふと溜め息をお吐きになってお部屋に帰ろうとなさいます)。*「おぼすさまのこと」は<お思いになっている通りのこと→本心を隠さずに言うこと→下心→恋心>となるようだ。*「わたりたまふ」は何度も語られる言い方だが、以前から分かり難い。字だけ追って行くと、「渡る」は<行く>にしても<来る>にしても<移動する>だから、「たまふ」は<移動中>か<到着した>事を言っているように思えて、以降の文を<到着地>での場面と思いがちで、そ

ういう場合も在ったかとも思うが、「たまふ」という現在形は前の動詞の開始を描写する言い方でもあるようで、「たまへり」と過去形にすることで、その動作の終了を描写するようでもある。此処でも下文を読むと、縁側の庭先の場面となっていて、どうやら「たまふ」は動作の開始の描写のようで、場面転換ではあるが次の舞台は<到着地>ではなく、母屋から少し出た縁側なので、「わたりたまふ」は<帰ろうとなさる>であり、この時点での絵は殿が席を立てて縁側に出掛かるまでの室内である。